國道筋に於ける史蹟

附　録

目次

一、明治天皇御駐輦趾
二、牧野原
三、大井川展望
四、牧野城趾
五、菊川の里
六、藤原宗行卿の塚
七、菊石
八、小夜の中山夜泣石
九、菊水の瀧
一〇、久延寺

國道筋に於ける史蹟

一、明治天皇御駐輦趾

由來日本國家の成立は富士を中心とする東西混一に依り始めて完成さる、乾坤一轉七百秋の覇業は破れ維新の大業就りて　明治天皇御遷都御東幸の御途次時恰も清涼なる明治二年十月御鳳輦を牧の原の原頭に駐めさせ給ひて御始めて秀麗なる富士の雄姿を御覽に入らせられ大井川金谷の景を賞し給ひしは實に此處である。序で昭和五年畏くも今上陛下には靜岡縣御巡幸の砌御鳳輦を駐めさせ給ひ親しく富岳を御展望遊されたのも亦此所である。

因に大正五年東京奠都五十年紀念祝典の式場に東海道五十三次の景を模し、其の一として金谷宿に明治天皇には馬上雄々しく金巾子（キンコジ）の御冠を召させられたる御勇姿にて倶奉を召させ給ひ御望岳の場を模したるものあり。全く五十三次中陛下の御影の存するはたゞ此の一場のみであったと申されるのである。

望岳　小原鐵心

『擡頭則八朶芙蓉、　屹立於群巒攢峯之上。
余嘗謂、箱根觀岳、爲第一、次之者、即此。
然此則、隔大偃洪流望之、是亦彼所無未易遽優劣也。』

御駐輦趾より眺めて

斷然群峰を超越し　富嶽の優姿は煙霧の裡
目を北に轉ずれば　大井川の水源地
白根赤石白皚々　更に南を眺むれば
水天髣髴遠州灘　大自然抱擁を心のまゝに

二、牧野原

金谷町より坂路を攀ぢ登って見れば廣茫たる平原が展開されてゐる、然し平々坦々たる地に低ひ茶の樹で埋められて目を遮ぎるものはないこれぞ牧野原臺地日本全土を代表し、世界的に其の名に負ふ牧の原大茶園地である。海拔三百米 長さ六里 巾二里に及ぶ、廣茫全く涯のない平地で舊大井川が作られた台地であって何處を尋ねても地層が固まらない、若ひ砂礫層が下位の第三地層の緩起伏浸蝕面を不整理に覆ふてゐるのである。道路工事等で掘鑿すると其の附着せる石が所々から出ることがある實に此の台地は早壯年間期にまで開折された「デルタ」であるといふことで、東斜面に於て最近鐵道省の調査によると茲に三十ヶ年間に三十有余尺の地殼的動搖を發見したと云ふ。要するに沈降とか隆起とか地殼動搖に支配されて持ち廻

りの道行を進んで居るのである。一望鬱蒼たる茶園を以て繞らした宏壯閑雅な建物は國立茶業試驗場である。これを見ても如何に優勢なる茶産地であるかを窺れるのである。茶樹栽培は幕末の武臣が多年手慣れつゝあった竹刀を捨てゝ鋤鍬を採りて此地を開拓し、朝夕大井川の旅人に待せし川越衆の移住地も今や參千町歩の茶園と化し、金谷町外數ヶ町村唯一の財源であり唯一の生命となってゐる。此地一帶の人士は日夕富峯の秀姿を眺めつゝ超然塵界を脫して業務に努めつゝあるのである。

三、大井川の展望

昔大井川の「デルタ」今の牧野原丘陵の開折された谷合から大井川に向って緩傾斜に發達した町が金谷町である。往時は東海道の難所大井川と小夜の中山とを前後に控へて殷賑を極めた宿場であった、今は省線金谷驛と大井川鐵道の分岐点であり國道の改良と共に將來大に發展せむとしてゐる。對岸島田町を境ひに中央に巾廣く靑松の間に白砂の如く展開されてゐるのが激流滾々として盡きざる大井川である。昔から

『箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川』

『蓮台に乘っても下は地獄』と唄はれた東海道隨一の難所である。抑も大井川の奔流激湍は固より天下の一大天險たるを失はずと謂ひしが苟も人力の及ぶ限りを竭したならば必ずしも越すに越れざる程でもなかっ

たので、而も行旅をして此の難所たらしめたのは所謂德川時代に於ける政略の一端より出でたるものであると思はれるのである。戰國時代に斯くして特に東海道の交通を重要視したので大井川の如きは架橋と渡船を嚴禁して歩行越のみとした。大政維新となりて初めて歩行越の甚だ不便である所から渡船の禁を解かれた、歩行越時代には蓮台越と言って京登り、吾妻下り、伊勢參宮、富士詣など八人懸りの蓮台に乘せられたり或は肩車で渡すものあり、相撲の關取りは人を雇はず丸裸になって土俵入りの格好で渡るものあり鄉相の雲客列國の諸侯は駕籠を台に据へ人足二三十人水堰ぎの傭夫は前後を圍って急流に足並を揃へて掛聲勇ましく渉すと言ふ。やがて幾春秋は流れて今はプラット式鋼鐵構橋が架せられた。

霞むなり橋長々と松の間(ひま)　小波

四、牧野城趾

星霜轉三百年　古城の趾に佇めば
春まだ淺き夕闇に　下弦の月のいと淡し

春風秋雨茲に三百余年甲州勢と三河武士が肉薄奮鬪して爭ひし牧野城も今は矮松の小暗き裡に名も知らぬ雜草に埋められた塹壕の趾と共に昔の面影を偲ばしむるのみである。

城の設計は天正元年甲州武田家臣馬場氏勝が高天神城に對峙して城東郡を攻畧せんが爲めに築いたもので當時は諏訪原城と呼んだのであった。同三年德川家康が之れを陷入るに及んで牧野城と改め同七年に廢城となったのである。

登牧野城舊趾　水雲

嵬然城趾憩還登　水驛人家喚欲應
嶽色常留東海雪　河流半帶北山氷
空濠狐叫荒烟冷　古井蛇蟠死水凝
三十年來如駒隙　兒時遊戯記吾曾

五、菊川の里

牧野原の原頭より俯瞰すれば山麓の緩やかな斜面に發達した聚落がある、此處ぞ宗行卿の靈を祀れる菊川の里である。一筋の流れこれぞ悲壯慘烈なる史上の痕を千載に殘せる菊川であり。此の川ありて菊川の里は遠き昔より詩に歌に唄はれ來ったのである。下流を酌んで齡を延び西岸に宿して命を失ふと嗟嘆せし人も『古もかゝるためしを菊川のおなじ流れに身をや沈めん』と詠ぜし人も共に滅びて變らぬものは菊川の

清流に昔ながらの月影を湛へて溶々たるを見るのである。菊川の里より小夜鹿の里を西に羊腸たる青木坂の險路を攀ぢ登る程に、小夜の中山てふ史上絶好の佳話を留めた所がある。今は寒煙落日四顧寥々可惜子育觀音を以て名ある久延寺の古刹あるのみ、續く連峯は無間山と謂ふて遺跡傳説の多き所である。

馬に寢て殘夢月遠し茶の煙　　芭蕉

六、藤原宗行卿の塚

宗行卿の塚は國道筋菊川の里にあり此の地は古昔より東西交通の要衝に當って大井川の難所を擁して遺跡傳説多く、就中哀傷胸に迫って後人をして惻々同情の念禁ずる能はざらしむるものは承久の亂帷幄に參画して回天の大業を翼賛し逆賊北條を覆滅して天皇御親政の御代たらしめむとした中納言藤原宗行卿の遺績である。時しも承久殉難の忠臣宗行卿が東國に送らる途次菊川の里に宿して

昔南陽縣菊水　汲下流而延齡
今東海道菊川　宿西岸而失命

と宿の柱に題した辞世のことは史上に隱れもなき事實である。老松の下に宗行卿の塚と題し一基の墓石を建て精忠を萬古に傳へ遺烈を千載に揚げんとして卿の靈を祀られてある。而して承久の亂凡そ壹百年を經

て藤原俊基朝臣が同じ咎あって鎌倉に送らるゝ時同じ菊川の宿にて

いにしへもかゝるためしを菊川のおなじ流れに身をや沈めん

と一首の歌を殘され東の旅にて殺されたるを遺骨を持ち來って此所に祀られたと謂ふことである。夫れ一日節をこの碑前に曳かば松籟颯々として誰れか悲壯慘烈なる昔ながらの哀史を偲ばしむ。

七、菊石

菊川橋の架設されてある場所は櫻が淵と呼んだ。河底こそ變って居るが其の昔は物凄き程の淵があったと謂はる、其昔白菊姫の身を投げた所で口碑として傳って居る。

時は建治の頃愛岩長者と云ふものがあって其折遠江に逆賊が起ったので、國司是を朝廷に奏聞した處時の後宇多天皇は一條三位憲勝に命じて征討せしめられ給ひ、憲勝は勅を奉じて遠江に下り賊徒を平定して諸民を鎮撫するの間此の長者の家に在りて其娘白菊姫を愛したりしが、憲勝は任を果して京に歸り白菊姫は憲勝のことを忘れ兼ねて世をはかなみ一夜屋敷を忍び出で菊川の櫻が淵に身を沈めた、姫には既に一子を生み名を月の輪と命じた、童子は健かに成長して弘安六年白菊の命日に何處へか行方知れずとなったので母の跡を慕って淵に身を投げしかと網を入れて見れば菊花の形をなした石一ッ懸ったので白菊の靈魂石に

化したりとて寺に納めて供養したと云ふ、今其の菊石は淵の小岳に祀ってある。
月の輪は其後菊川の南なる寺に在るを尋ねた、然し志に依って出家させ非常に學德高くして後に空叟知者と號して平田寺中興二氏の開基となったと云ふことである。

八、小夜の中山夜泣石

菊川の里を登る坂路より日坂に下る迄の間約一里半許りの間を小夜の中山と呼ぶ。菊川は史的であり小夜の中山は歌の名所である。茲に東海道筋に於ける不可思議の名物たる夜泣石がある。四時見物人の絶へたることはない。
抑も夜泣石の由來は今より凡そ壹千年前の昔一人の姙婦が黄昏るゝ頃家路に歸る途中山賊の刄に懸って大石の下に殺され其の時胎内に在った兒を分娩し孤々と泣き號びけるを偶々通行の僧が之れを拾ひ上げて飴の餅で養育したといふこの僧こそ山上に座す觀音の化身であると傳へらる。
夫れより夜な〳〵此の石の泣き悲むを以て夜泣石の名が人口に膾炙する樣になった時しも弘法大師御通行の折此の由聞召されて、そは姙婦の迷魂なり供養し解脱せしめんとて南無阿彌陀の五文字の名號を杖にて書き給ひけるに其の夜啼の聲止みしと言ひ傳ふるのである。

石は高さ三尺經二尺余許の丸石で其の後佛号を刻み付け石の一端には當時賊の刄の石に當ったと云ふ傷跡が歴然と殘って居る、此の側の茶屋は昔ながらの子育の飴の元祖であると言ふことである。

年たけて又越ゆべしと思ひきや
命なりけりさよの中山

西行法師

九、菊水の瀧

近代文明の産んだ幾何學的直線型の道路は旅人にとっては甚だ無趣味なものである。此の無趣味は平坦地に於て特に烈しいが山間地等には移り變る四圍の風光に依って其の不滿を補ふことが出來る。此處は東海道筋の名勝地小夜の中山
小夜の中山と菊川の里を境に川あり菊川と云ふ。菊川の上流に瀧ありこれを菊水の瀧といふ。里人は俗に弘道仙人の瀧と言ふ。
其の昔弘道仙人が庵を結びし所仙人は行者であった、好く彈弦を友とし其の道の蘊奥を極め殊に菊水の曲は妙なるものであった。
茲に月小夜と言ふ姫あり、仙人の門を敲き彈琴の妙曲の傳を受けた、此の里の傳記として月小夜姫と怪鳥

の蛇身鳥を退治せし三位良政卿に絡はる故事が有る。

瀧は往時鬱蒼たる深林中に七段となり滾々として盡きざる名瀑であった。今は荒れ盡し僅に昔の影を留め二丈有餘の一瀑あるのみ、この一瀑も既に工事の時に埋沒さるゝ處であったが國道筋の一勝地として保存の必要を感じ半ば復活したのである。

一〇、久延寺

舊國道の竣ならざる以前の舊道筋小夜の中山の峠に一寺がある、之れぞ夜泣石物語りに因緣して子育觀音を以て名高き久延寺である。其の昔山賊の爲めに殺された姙婦の產落したる一子音八を此の寺の住職深く憐み飴を以て養育し其の子が成長して後に遂に母を殺せる賊を討て其の仇を報ひたと謂ふことは觀音の加護による故であるといって子育の觀音と號したとのことである。一時本寺は定められた住僧もなかったのであるが其の後眞言宗となって今日に及んだのである。東照宮樣關ヶ原の役に此の寺に憩はせ給ひて御茶を聞召され松の一樹を御茶亭に御手植遊ばされ今尙存して居る、其后御通御の節は屢々此寺に御憩ひなされたとのことで御茶亭の跡等がある。此の寺の附近に涼松、姙婦塚、御茶屋塲、御上井戸經塚、鎧跡、忠僕仲吉の碑等舊蹟が存在して居る。

（完）